

亀岡保津川宣言

丹波高地に源を発した保津川（桂川）は、亀岡盆地を貫き、保津峡や京都・嵐山を経て宇治川や木津川と合流し、淀川となって大阪湾へと注いでいます。古代から物資輸送の大動脈として千年の都を支えてきた保津川水運の歴史は、日本を代表する溪流の舟下り「保津川下り」に受け継がれ、日本各地はもとより、世界から多くの観光客を集めています。

しかし今日、この保津川でも多くのごみが流れ着いている光景は珍しくありません。古来よりの景勝の地や、豊かな生態系を守るためにもごみ問題の解決は急がれます。2009年7月に成立した「海岸漂着物処理推進法」においても、海ごみは「山から川、そして海へとつながる水の流れを通じて」運ばれるものとされ、円滑な回収や効果的な発生抑制の実現とともに、多様な主体間での役割分担と連携の必要性がうたわれています。

第10回海ごみサミット2012 亀岡保津川会議は、「保津川がつなぐ ひと・まち・うみ」をテーマとして、3日間開催されました。海岸線を有しない内陸部で初めて開催された今年のサミットでは、様々な視点から今後の海ごみ対策のあり方について検討を重ねました。

昨年の東日本大震災による海洋漂流物の事例からも明らかなように、ごみは海を漂い、遠く離れた国々にも流れ着きます。それだけに、地域の身近な水路から支流、そして大きな河川へ、さらには海へと流れ出すことを共通の認識として、それぞれの地域における発生抑制対策を講じるために、次のような具体的な行動に結びつけることをここに宣言します。

1. 協働を通じた発生抑制への取り組みの充実

人々の生活の場として、企業活動の場として、NPOのボランティアな活動の場として、さらに行政は管理者として、皆が川への関わりをもっています。私たちは、この川への関わり方を通じて、協働の精神の下、ごみの発生抑制に向けて取り組みます。

2. 市民参加によるごみのモニタリング体制の構築

亀岡市で進めている、オンライン・ごみマップを用いた市民参加型の川のごみのモニタリングをもとに、効果的な回収を進め、海洋へのごみの流出を防ぐとともに、内外の多くの地域とこの手法を共有し、海ごみ問題への社会的な関心を高めます。

3. ごみの散乱防止に向けた恒久的な仕組みづくりの構築

海や川のごみの大半を占める生活ごみの削減には、人々のモラルの向上と同時に行動を変える動機づけが不可欠です。各地域で出来る施策の一層の充実に加え、廃棄物の確実な回収を動機付けるために有効な手段とされるデポジット制度や、拡大生産者責任の制度化など、資源循環型社会の再構築に向けた社会的な仕組みづくりを全国の自治体とともに進めます。

平成24年8月26日

第10回海ごみサミット2012 亀岡保津川会議実行委員会

会長 栗山 正隆